

5歳

からでも間に合う
英才教育

6章

何ができるか考える

とりあえず始めよう●今ここで何ができるか考えて

何から手をつけていいかわからない勉強でしたが、少しは効果が出てきました。後から思うと、「とりあえず始めたこと」がよかったのです。最善の方法を調べたり、人の意見を聞いているうちに、子供はどんどん大きくなつてしまします。

なんでもいいから始めることです。そうすると改良すべき点が見えてきますし、まったく別の方法がひらめくこともあります。自分で考えたゲームと同じようなことが本に書いてあったり、実際に市販されていたりすると「人間って似たようなことを考えるんだなあ」と妙に納得したりします。

経験してはじめてわかるのですが、大事なのはやり方ではなかったのです。やり方は違っても結局目的は同じ、座らせるための道具、お話が聞けるようにするための手段に過ぎないということ。大事なのは「手をかける」ということだけだったのです。

次に大事なのはいつも「今ここで何ができるか」という姿勢だと思えます。例えば都市部では、私が故郷で見た抜けるような空の青さも、五月の緑も、夜の闇も見せてやれません。へびも動物園で見ただけですし、潮だまりの魚たちも見せてやれません。けれど、そんな望んでも無理なことはさておいて、今ここでできることを考えます。この近くでも、探せばまだジユズはあるし、オナモミだって見つけられます。ススキもあるし、その茎には大カマキ

リの卵が見つかります。それに、私が田舎にいたときに憧れていただけのサーカスを見せることもできるし、人形劇だつて本物を見せてやれるではないですか。

確かに、「下の子が小さいから」「共働きだから」「夕飯のかたづけが終わっていないから」そう思っているうちに毎日過ぎてしまいがちです。それでも「今ここで何ができるか」と考えた方がいいようです。私は夕飯のかたづけが済んでいなかったら、テーブルだけきれいに拭いて、そこでことわざカルタの色塗りをさせました。茶碗を洗いながら説明したりほめるくらいはできます。下の子がやりたがったら、むしろしめたものだと思つて、同じものを用意してやればいいのです。できなくともかまわない、何分かでも人の指示にしたがつて座ることができればいいのですから。

「鬼に金棒だつて。怖い鬼がもつと恐くなつちゃうよねえ。鬼は赤鬼にしてください。できたら教えてください」「できたね。今度は金棒を黄土色にできるかな」というふうに。

教材をつくるときも「○○をつくるためにはなにが必要か？」と考えるより「これを使つてなにができるか」と考えた方が手っ取り早いようです。つまり「言葉を増やすカード遊びは……」と考えるより「チラシを使つてなにができるか」という考え方です。材料を揃えなくてはならないのはつい先送りしてしまいますので、まずはそこにあるもんから手をつけていくことが大切なのではないでしょうか。

家の中では何ができる●お風呂場、台所……、それぞれで考える

さて、家の中では何ができるのか、場所別に考えてみましょう。

お風呂場ではどんなことができますか。

浮き沈みの実験、水蒸気の話（ガラスが曇っているでしょう。天井から水滴が落ちてくることもあるでしょう）、石鹸遊び、鏡遊び、空気を閉じ込めた洗面器遊び、しわしわの風船をお湯につけておくとうなる？、お母さんが入ると水かきが増えるのはなぜ？、ペットボトルや水筒を持ち込んで水の量を比べると……、きつとみなさんはずもつと別のことも思いついたでしょう。数を数えたり、逆唱したり、お話を聞いたり……、そういうのはもちろんですけど、お風呂場だからこそできることもありますよね。

台所ではどうでしょう。ここは根気さえあれば、生活のほとんどのことが伝えられそうな場所ですよ。缶切りや米研ぎなどの生活の技術、食材量の勉強。

例えば、アジの側線をさわらせて、うろこはライトスcoopでのぞき、卵を割って、からざや胚を確認するとか、味噌汁のあざりが口を開けたところで出水管、入水管、えらを見るとか、片栗粉を溶いたときには、でんぷんは加熱すると固まることを教えられるし、熱い油に水を入れるとはねることから沸点の違いを教えられるでしょう。

言葉で表現しなくてもいいと思うのですが、経験をさせておけば「ああ、あれね」と後でぱつ

と結びつくと思うのです。

食卓では、食べているものについて聞いてみます。「この五目ずし、入っているのは何だ？」
「今日の給食は何だった？ 何が入っているの？ 家のとどう違うの？」聞いてみると結構あやふやな答えでがっかりすると思いますよ。

それから食べ終わってのんびりしているところで、今日の新聞の写真の解説をします。全部なんて無理ですから、一日一枚ずつ続けることです。

『頭のいい子に育てる本』（ジェームズ・アルビン）には新聞の四コママンガをばらばらに切り抜いて、順番通り並べるといふ遊びがありました。家でとっている新聞は、朝刊は台詞が多く、夕刊はほとんど台詞がありませんので、それぞれおもしろいお話パズルになります。どれも誰にでもできることだと思おうのですが、「今度やろう」「機会があつたらやろう」と思つてしまい、今すぐにできないということが一番難しいのかも知れません。

外出したら何ができるか●食事、旅行……、みんな好奇心

外に出かけたらそれこそ世界は広いので、やることはたくさんあります。外出するときには、家でつくった漢字カードやゲームを持って行くこととは思いません。その場その場で目にするものを、全部珍しがつて見ることにしています。

食事に行ったら、お寿司屋さんやラーメン屋さんのようにカウンターのあるところはカウンターに座ってのぞき込んで、知らないことは聞いてみます。どうせその道の人にはかなわないので恥ずかしがることはありません。

電車に乗ったら、「あつ、ガスタンク!」「ここは高架になつているんだよ」「この時間は上りと下り、どちらが混んでいるでしょうか」と次から次に話したいことが出てきます。

車の中も同じで、基本的にはそこで見られるものを伝えていくようにしています。でも夜の移動はちよつとつまらないですよ。そういうときはしりとりやお話クイズやお話どんどんをします。反対言葉（暑い寒い）逆さま言葉（イチゴ、ゴチイ）、ことわざ合戦（「あ」のつくことわざから順番に誰が次のことわざを早くいえるか）もやりますが、あまり根をつめると疲れますのであくまでもひまつぶしです。

旅行するときは一か月くらい前から楽しめます。この夏は佐渡と長野と栃木と決まったとき、長女は喜んでその辺にあるパンフレットを切り貼りして「佐渡ガイドブック」をつくつ

ていました。それを見て、あわてて私も図書館に走りました。

長野に行く途中、浅間山のふもとの鬼押出しに行き、佐渡は金山、栃木では大谷石の採掘跡に行くことになっています。その前に科学博物館に石のでき方を見せに行きます。そうすれば、先日行った長瀬と合わせて、堆積岩、火成岩、変成岩の話がしやすくなるでしょう。

私の住んでいる所は埼玉とはいっても東京との県境ですので、普段は石一つ拾うのにも苦労します。それがいざ出かけると拾いたいだけ拾えますので、車のトランクは石だの虫籠だの凶鑑だのでいっぱいです。でも残念なことに、私は石にも詳しくありません。石のできかたの話はできても、実際に拾い集めた石を正しく分類できているかはなほだ怪しいものです。でもそこは頭を下げるのも親の仕事、理科の先生や石に詳しい人に監修してもらいます。散歩するとき、実はこれが一番収穫があるのです。何といってもまわりのものをさわれまから。葛の蔓を見たら、根っこまでたどって掘ってみるとか、やまいものムカゴを見つけたら取ってムカゴご飯をつくるとか（意外にあちこちの駐車場のフェンのフェン巻き付いていたりするものですがはつきりいつてまらなかったです）。よその家の塀の外に落ちていた青い梅や柿やカリンを拾ってきて縦に切ったり横に切ったりで「種はどうかな、味はどうかな」とかじってみたり、バラの赤い新しい柔らかいトゲを触ってみるとか。

そんなわけで、ひところは鞆の中にいつもビニールの使い捨て手袋を入れていました。

我以外みな我が師●身の回りにいるたくさんの方の「先生」

教育熱心な人や保育者の中には、自分で勉強してそれを子供たちに伝えようと努力しているタイプの人と、町の中に先生はいないかと探して歩くタイプの人がいるようです。私は後者です。

味噌や豆腐をつくるだけならつくれるという人と、どうすればおいしく安全なものがつくれるかばかり考えている人では、同じ味噌や豆腐でも全然伝えられるものが違うでしょう。お菓子や手芸でも同じです。三しか知らない私が三教えるより、一〇知っている専門家に三教えてもらった方が絶対いいに決まっています。

田舎から玄米が届いたとき、お米屋さんにただ精米を頼むのではなく、お願いして精米しているところを見せてもらいました。黒っぽい玄米が糠と白米に分かれて出てきたとき、長女ははじめて糠がなんだかわかったようです。糠はスーパーで売っていますから見たことはあったのですが、やっぱり実感はなかったのです。

なじみの豆腐屋さんにもお願いして、豆腐をつくる場所も見せてもらいました。本では知っていますが、おカラや豆乳がこれで急にぱつとわかるようになります。味噌は自分でもつくりますが、やっぱり味噌づくりにこだわっている人に教えてもらいました。そんなときしみじみ思うのですが、つくり方だけでなく、それにかかる思いや、その方のお人柄を伝えて

もらえたのが、子供にとってははとも良いことのようにです。

近くで蛍を育てている人がいます。無理にお願いして見せてもらいましたら、言葉にできないほど感激しました。

庭には水が循環する水路をつくり、成虫が産卵できるように苔を植えてあります。家の中の一部屋には一年中エアコンを入れて、たくさんの水槽を管理していました。その水槽の中で、蛍はカワニナを食べ、岸に上がってきなぎになれるように土を入れてありました。

自然の中の蛍は見たことがありますし、子供にも見せたことがあります。でも、私が感激したのはその方の情熱です。育てた蛍を公開してお金を儲けるわけでもなく、一年中、休みごとにカワニナをとりに行き、水を管理している情熱です。蛍の飼育に取り組んでいる公的機関を知っていますが、こういう個人の情熱にはかなわないあとため息をついてしまいました。そういう方に会えたことは子供にとっては蛍を見たことより幸せなことかも知れません。

母校の先生のとつて知り合った外国の留学生もお招きして、いろんなお話を聞いたり料理を教えてもらったりします。子供にとつてはタイやラオスといった知らない国が身近になります。私にとつてはそのままのまじめさと優秀さが胸に響きます。

「我以外、みな我が師」という言葉の通りです。完璧に世の中のことを教えてやろうと思うより、子供が世の中を知るための窓を開いてあげるのが私の仕事だと思います。先生はいないかとアンテナを張りめぐらすこと、それが大切なのです。

そうするのが当たり前●まず習慣にしてしまおう

繰り返しになりますが、大切なのは、やり方ではなく手をかけること、そして、すぐに始めることでした。けれど、ちよつとばかりのコツはあるようですので、それをお伝えしたいと思います。

一つ目は、勉強することを当たり前にしてしまうということです。家で習慣づけていることは、夕食前に公文と教育テレビのビデオを終わらせること、寝る前に国語の教科書の音読をすることです。それ以外は、学校の宿題があったり、見たいテレビがあったり、みんなでゲームをしたり、本を読んでもらったりと、毎日いろいろです。

長男くらいになつてしまうと「なんでそういうことをしなくちゃいけないわけ？」と、理屈をこねはじめます。もともとやりたくないわけですからどんな理由をつけても納得しません。でも小さい子は、はじめのうちだけ親が根気よくつきあつてやれば、すぐできるようになります。文句をいう前にさつさと終わらせて、好きなテレビを見にいきます。

今、四歳の子と七歳の子が同じテーブルで同時に勉強をしています。そうなるまでに五歳で始めた長女は一年かかりました。それを見て育つた下の子は、始めてから半年かかりませんでした。これは、習慣化させるのは始めるのが早いほど楽だということです。

長女はそのために、はじめはとりあえずパーを毎日やり、その後は公文に変えました。

次女にはペーパーはまだ難しすぎましたが、姉の真似をしてやりたがりました。公文でも良かったのですが、はじめは送迎の都合がつかず、とりあえずは塗り絵や簡単な迷路や市販の「おえかきブック」のようなものをそれらしく「お勉強の時間です」といつては一、二枚やらせました。もつとやりたがっても、乱雑にやらせないため（実はつきあいきれないため）少ない枚数しかやらせませんでした。

「○○ブック」類の中には使いものにならない問題もたくさんありますが、自分で用意するよりは楽です。良質な問題が載っているのは、学研の『デイズニー知育あそびシリーズ』です。やや難しいので「一○○ブック」の類で座ることに慣れてからが良いと思います。親にとつては一週間に一回一時間勉強させるより毎日一〇分やる方が難しいのですが、それをしないと「当たり前」のことにはなりません。

一〇年前の私なら「そんなことくらい」と思ったでしょうが、大間違いでした。もし、よそのお子さんと自分の子との間に三くらいの違いしかないとしたら、手は一〇倍はかけられていて、見えない力もやっぱ一〇倍くらいに違うと考えた方が間違いありません。追いつくのはすぐだと思ったらそれも大間違い、その差は年々開いていくばかりで絶対に追いつけません。それが、子供に手をかけてみてはじめてわかりました。

教材は使い捨て●手づくりでこだわらずぎるのも考えもの

教材は使い捨て感覚でつくること、これもコツの一つです。

布に刺繍で漢字カードや五〇音図をつくったひとがいると聞きました。カードにすべてビニールシールを貼っている人もいます。そういうのは時間のロスとしか思えません。子供はそれをつくり上げるのにかかる時間の三倍の早さでものを覚えられるはず。そういう手づくりでこだわっている間に、覚え損なってしまうものが相当あると考えなければなりません。また、「下の子に使えるから」と思っている人もいますが、それもあまり感心しません。実際には、その子のためにつくった教材ではないとほとんど使いませんし、その子のために買った本でないとあまり読まないものなのです。

積木やカルタは別としても、漢字カードはそこで見たものや今読んでいる本にあわせてつくるのが一番覚えやすいし、漢字双六などもその子の覚えている漢字にあわせてつくってやるからおもしろいのです。ていねいに三個の教材をつくるなら、少しおおざっぱでも、改良しながら一〇の教材をつくったほうがいいと思います。

それから、本を切りまくることをお勧めします。「本を切るなんて」と罪悪感を覚えるかも知れませんが、一回切ってみると後は全然恐くありません。何年飾っておいても役に立ちませんが、カルタにすれば五〇枚は覚えられます。古本屋さんやバザーで図鑑や写真入りの本

をたくさん仕入れて切りまくりました

『おみちゃんさつちやんのこどもえじてん』は最初から最後まで、言葉やお話にそつた絵がたつぷり載っていて、切り甲斐のある本でした。「なぞなぞブック」や漢字カードに隅から隅まで使いました。『絵で覚える漢字の本〇年生』も切るのに良い本でした。本を切るときは「裏はどうするのか」とか「もつたいない」と考えないで、裏表どちらかだけでも覚えられれば良いと割り切ってください。

教材の材料は、最低必要なものだけは買ったためしておくのもコツの一つです。私はカードをつくるのに板目紙を使いましたが、これは切るだけでもひと仕事ですから、お店にお願いして八分の一に切ってもらい、一〇〇枚単位で購入しました。それを切つて一六分の一にするのは簡単です。また、工作用紙も欠かせません。これがあると箱やパズル、表をつくるのにとても便利です。白紙のシールも何百枚と購入しました。ブックと呼んでいるビニールシールも厚手のものを一巻き買っておくと便利です。その他には、折り紙、色画用紙、ケント紙、トレーシングペーパー、各種のシール、プラ板などです。

廃物利用するとか、失敗しても工夫してやり直すとか、それはすばらしいことですが、あまりこだわっていると子供の成長にあわせてつくるといふ大事な目的を忘れてしまいます。漢字カードだけで三〇〇〇枚つくれたのは、こだわらなかつたからだろうと思っています。

根性主義は捨てよう●できなかつたら方向転換を

三番目のコツは、「できるまで」の根性主義は捨てることです。私は一見無駄に見えるくらい、山のように市販のゲームやペーパー類を買い込んでいます。一度しか使わなかつたものもありますが、もつたいないとか、これが終わつてから次のをやらうと思つたことは、一度もありません。これらの教材はしよせん「他人の子」のためにつくられたものですから、良いところだけをとればいいと割り切つています。

例えば、市販の色指定塗り絵は相当シンプルな絵で（「はじめてのクレヨン」の類）、はじめのうちには参考になりますがあつという間に終わりますし、すぐに物足らなくなります。それに、いまどきの子供はどんなに小さくても、リングやスイカの絵よりキャラクターものを喜びます。それに気づいたら「二冊目買ったばかりで、まだ終わつていない」なんて思わないでさつさと方向転換です。シンプルなキャラクターものを買うかつかつくるかして、色見本を工夫したほうが利口です。

ペーパー類もできないのがあつても、それをできるまで説明してやらせようとはしません。積木の数数えについて前に話しましたが、それができないということがわかれば十分なのです。うっかりすると、その紙に何度も印をつけさせ、数え直させている人がいますが、それは「あたる、あたらない」程度の学習です。できないことがわかつたら、その紙からはいったん離

れて「どうすればできるようになるか」考えます。「絵を見て数えられない↓この絵を立体として見ているか? ↓絵を見て積ませる↓積めない↓実物をまねして積めるか? ↓積めるものと積めないものがある↓五個くらいからまねさせる」というふうに一段階ずつ前の段階に戻って時間をかけてやればいいのです。

自分でつくったゲームも、子供がつまらなさそうにしたらやめます。発達段階にあつていなかったか、工夫が足りなかったか何か原因があるのです。「あんなに時間をかけてつくったのに」ということになりかねませんので、そういう意味でも教材は使い捨てるの素材でつくらねばなりません。布に刺繍してつくった双六や木でつくったパズルだとシヨックが大きいです。しょうが、カレンダーの裏に書いた双六や工作用紙でつくったパズルならすぐごみ箱行きでも平気です。

漢字カードも「この二〇枚を全部覚えたら次に行こう」と思わないで、どんどん新しいものをつくりまします。例えば「屋根」が読めないからといって、そればかり繰り返さず、どんどん新しいカードをつくつていき、その中に「花屋」「魚屋」「屋上」「屋内プール」と、同じ字を使ったものがある方が読めるようになります。その時には「家に関係がある字だ」というイメージもできています。

本当の英才児はもつと「根性主義」で育てるのでしょうが、学習習慣のついたお利口さんはこれくらいで育てられます。それに親子とも消耗しませんから、長続きします。